

建専連・道建協への要請(続報)

新型コロナの影響やCCUSについて懇談

4月27日におこなった建設産業専門団体北海道地区連合会(建専連)と北海道建設業協会(道建協)との懇談・要請の続報です。(「道本部2022年春闘速報」No.12参照)

建専連では、阿部孝明事務局長と懇談しました。建設現場でも新型コロナのクラスターが発生するなか「専門業者は中小零細企業の高齢の会員(事業主)も多く、夫婦そろってコロナ陽性になれば仕事を中断せざるを得ない状況がうまれている」「技能実習生問題では、国に帰れないことで特定技能に切り替えて対応も変則的になっている」などの影響が建設業界でもいまだに広がっている点について話されました。

また、「建設キャリアアップシステム」(CCUS)については、昨年と同様に登録利用料の値上げの影響もありレベル1(ホワイト)判定で留まっていることや、賃金目安(型枠工のレベル4で年収基準820万円)が示されたことに期待は寄せられるものの「東京の水準が果たして地方でどう現実的なものとなるか」「北海道では職種を掛け持ちして収入を維持している建設労働者も多い」など、厳しい状況もうかがいました。また、地場の元請企業の関心は薄くカードリーダーを設置していないところも多いことや、そもそも資格がなくても良い仕事する人がいるなかで、経験年数は机上の計算でしかないため評価制度そのものの在り方も問われていると指摘されました。

なお、道建協とは今後日程を調整して懇談を持つ予定になっています。

JR北海道「安全に関する労使合同会議」

6月1日、JR北海道の第34回「安全に関する労使合同会議」がおこなわれ建交労北海道鉄道本部から竹田委員長と最上書記長が出席しました。今回のテーマは、昨年6月7日に函館本線七飯駅・大沼駅間で線路の保守作業車が、ブレーキが機能しない状態で線路上を走行した事象について再発防止対策の実施状況が説明されました。

竹田委員長は「対策も重要だが、事象発生までの長期にわたり作業用車の点検が不十分だったことや外注作業でおこなわれてきたことで社員が確認できる環境なのかという問題点を思い浮かべた。背景として人材不足が大きく影響していると感じる。これも経費削減の取り組みの延長線上だと考えると、経営体力が希薄な会社への国からの財政支援のあり方を問う課題であり、安全確保のために必要な財源の国費投入を国土交通省は真剣に検討し実行しなければならない状況だと考える。また、JR北海道には一歩間違えば大惨事となっていた今回の事象を二度と繰り返さないために万全の対策を求める」と話しています。

北海道鉄道本部「カレイ釣り交流会」

6月3日、北海道鉄道本部の「カレイ釣り交流会」を開催し8名の仲間が集まりました。4月の小樽・祝津沖に続いて今年2回目になる伊達市黄金沖での船釣り交流は、天候が心配されましたが曇り空ながら風も波もなく太陽も時々顔を出すなど海の状況は穏やかで楽しい一日を過ごしました。前日までの天気の影響で大漁にはなりませんでしたが、大物があがるポイントでは54cmのイシモチガレイに40cm級のマガレイや黒頭ガレイ、「カレイの王様」と言われる鷹ノ羽(マツカワガレイ)、煮付けで食べられているカスベ(えい)も釣り上げられました。今回は総重量の計量はおこなわず身長賞はイシモチガレイを釣り上げた室蘭支部・渡部さん、珍魚賞がカスベを釣った追分支部・鷲沢さんと真っ黄色の婚姻色に染まった鷹ノ羽をヒットさせた苫小牧支部・竹田さんでした。